

## 感じたことを自分なりに表現する音楽学習

### 1 豊かな感性を育む音楽科の支援

音楽科教育は、音楽の持つ芸術的な特性を十分に生かし、心豊かな人間の育成に役立てることを教科の目的としている。特に強く求められているのが、豊かな音楽体験の中で育まれる創造性、協調性、社会性、あるいは探究心や心の解放などを生かして、知性と感性の調和のとれた人間を育成することである。このような音楽科教育を実現していくためには、子どもたちが表現や鑑賞といった音楽活動を通して自分なりの感じ方や考え方をもち、それを生かし、よりよい音楽を追究するために自ら工夫して表現しようとする意欲を高めていける、また一人ひとりが自分なりのめあてをもち主体的に音楽活動を進めていく仕方を学び、そこから得られる成就感や満足感で新たなる活動意欲を高めていける学習指導を構想し展開していくことが大切であるといえる。つまり、児童一人ひとりが自分なりの感じ方や考え方をもちることができるようにすることが豊かな感性を育む出発点ではないかと考える。これらのことをふまえて、ここでは、子どもの感じる、考える段階でどのような支援をしていけばよいかを中心に豊かな感性を育む授業に迫りたい。

### 2 指導事例 第5学年「曲想を感じとって歌おう」

#### (1) 題材について

歌を指導していく際、とかく陥りやすいのは、曲想表現について教師が、教師の感じ方を押しつけてしまうことである。どんなに美しい表現だからと教師が意図したところで、子どもが美しさに気づき、感じていなければ、真の表現の高まりはあり得ない。こうした観点から、ここではできる限り子どもの感じ方や表現を大切にしながら、子どもが主体的に曲想をイメージし、自分なりの表現を深め、高めていけるようにするには、どのような手だてが有効であるかを探っていきたい。

本題材は「春の風」(和田徹三作詩 広瀬量平作曲)をとる、グループごとに歌詞の内容やフレーズの流れから曲想を感じとり、どのように工夫して歌ったらよいかを話し合い、話し合ったことを実際の歌唱表現に生かしていくとするものである。この活動を支援していく手だてとして、話し合ったことを図形楽譜に表したり、手拍子によるリズム打ちで曲を表現するという具体的方法を取り入れる。こうした手だてが子どもの豊かな感性を育む授業

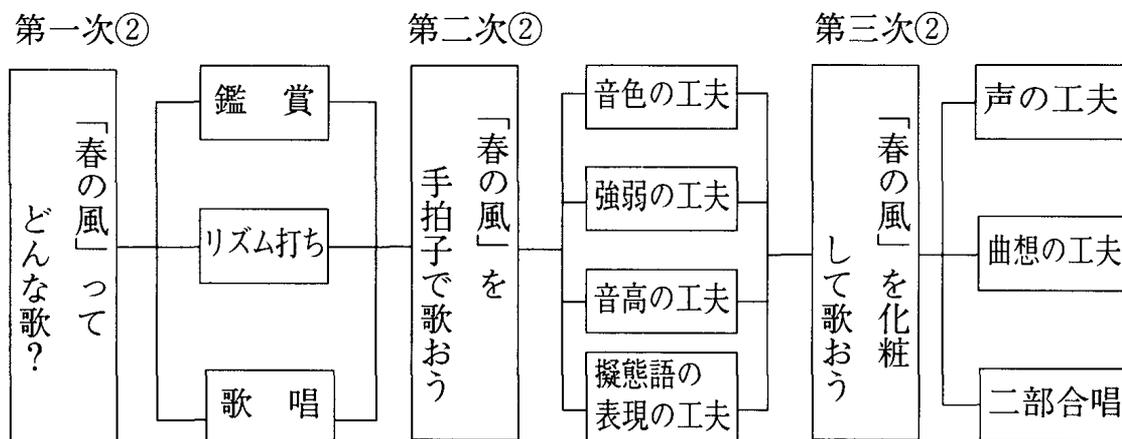
にどのように迫っていくものになったかを子どもの実際の表現の状況や発表などから分析して考察していきたい。

(2) 指導目標

①グループで曲想を感じとり、音楽の美しさを求めて表現しようとする意欲が持てるようにする。

②友だちといっしょに歌う喜びを味わい、楽しく音楽活動ができるようにする。

(3) 指導内容と計画・・・6時間（本時 第二次 第1時）



(4) 授業仮説

絵や記号を使って楽譜に表す活動や、リズム打ちをするなどの身体表現を通して曲想を感じとる活動を行えば、表情豊かに歌う意欲が高まるであろう

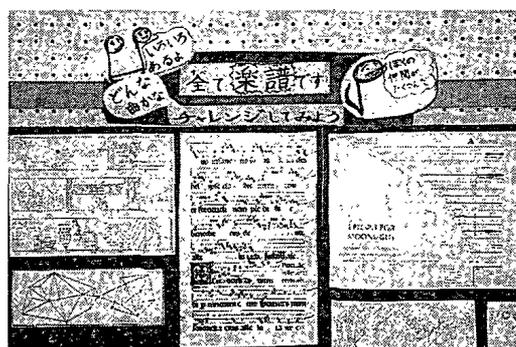
ここでいう「曲想を感じとる活動」とは、強弱はどう変化させるか、速さはこれでよいか、どんな声（音色）で歌ったらよいかなど、曲想を表現するための音楽的要素を手がかりに、曲全体の表情に迫っていく活動を意図する。こうして、感じたり、気づいたり、考えたりしたことをもとに、自分なりのイメージを持ち表現を工夫していき、振り返りながら更に自分のイメージに合う表現を追究していく姿を「表情豊かに歌う意欲の高まり」ととらえ、分析していく。

### 第三章 豊かな感性を育む授業実践

#### (5) 指導の実際

##### ① 指導にあたって

子どもが自分の思いを音楽で表現していくには、これまでにどのような音楽経験を積んできたかが重要になってくる。そこで手拍子については、毎時間の授業の導入で、リズム模倣やリズムリレーなどの活動を取り入れていくことを通して、手拍子による音のいろいろな可能性に気づかせていった。図形楽譜については、前学年までの学習の想起をしていきながら、小さい簡単なものを制作したり、古今東西いろいろな楽譜があることを知らせる場を設けたりして、発想の手だてにしていった。グループの発表では、どこをどう工夫したのかという観点を明確に示すように言葉かけし、発表する側、聴く側双方がめあて意識を持って学習に取り組めるようにしていった。



##### ② 本時の目標

グループごとに曲想を感じとり、「春の風」を手拍子で表現する。

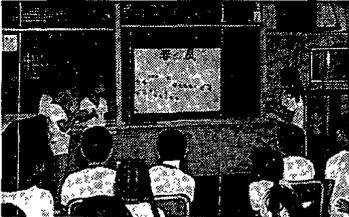
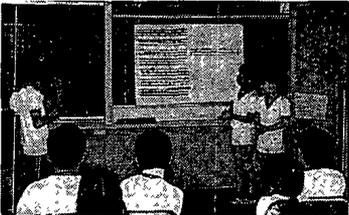
##### ③ 準備

CD「春の風」、図形楽譜、リコーダー

##### ④ 評価の観点

音楽への関心・意欲・態度	「春の風」の曲想の工夫を楽しみ、進んで活動している。
音楽的な感受や表現の工夫	手拍子や絵や図を使って、曲想を感じとる工夫をしている。
表現の技能	曲想を感じて表現している。
鑑賞の能力	お互いの表現のよさを見つけながら聴き合い、自分の表現に生かそうとしている。

⑤ 学習の展開

学習過程および教師の支援活動	児童の主な学習活動
<p>①「ハローハロー」を歌う 「はじめます。目を閉じて下さい。それじゃあねみんなかたくなっているので、声を出して緊張をほぐそう。」</p> <p>「いいじゃない。きれいだね。」</p> <p>②手拍子でリズム模倣する。 「まねして下さい。」 ○強弱をつけたり、足を使ったり動作を入れたりしてリズム打ちをする。</p> <p>③グループごとに「春の風」を手拍子で歌う練習をする 「前を向いて下さい。今日はみんなの書いてくれた楽譜が一体どんなメッセージなのかを手拍子でやってもらいたいと思います。」 「これが今日のめあてです。読んでみよう。」</p> <p>「春の風」を手拍子で たたこ ————— 歌おう</p> <p>「たたこうではありません。(たたこうという紙をはがし) 歌おうです。手拍子で歌う練習を10分まで、まだ楽譜を書き足したい人は時間を見ながらやって下さい。場所は適当に広がってね。」</p> <p>○BGM「春の風」</p> <p>④グループの発表を聴き合う</p>  	<p>立って「ハローハロー」を歌う。 全体的に和やかな雰囲気。 「緊張がほぐれた。」</p> <p>(A君) 常に笑い、のっている。 (Bさん) 一生懸命参加している。 (Cさん) 笑顔で真似をしている。</p>     <p>「ぼくらは音の低、中、高を色の違いで表しました。この楽譜を見ただけで、どこの部分かわかる人はいませんか。」 (「ブクブクふとったきぎのめを」) 「あたりです。みんなわかりましたか。これで1班の発表を終わります。」 ○「私たちはく強弱について書いてみました。」 (はるのかぜはかけていくよ) (Aくん) 1回失敗するが、2回目は班のみんなの息がぴったり合う。 手の打ち方を変えて演奏。終わってほっと笑みもれる。 ○「工夫したところは、タンのところは普通のまる、タタのところは半分のまる、のばしたところはタイでつなげたりしました。」 (Eくん) 友だちを見ながらたたく。 </p> <p>○「ドレミファソラシドに分けて、譜面を書いてみました。低いところで手をうったら低い音が出るような気がしたので、それで書いてみました。」 (Cさん) にこにこうれしそうに発表する。  「わたしら、ちゃんとやったよね。男子が少し悪かったよね。」 ○「ぼくらはりんごでしました。工夫したところはりんごの大きさです。」 </p> <p>○「今から始めます。できてないんだけど、音の高さで書きました。」 ○「音の大きさを、まるの大きさで表したり、高さをグラフみたいにして表しました。」</p>

### 第Ⅲ章 豊かな感性を育む授業実践

#### ⑤本時のまとめをする

「一言、どうしてもあの班のここがよかったから言っておきたいことはありませんか。」

「先生から、SさんとO君の手拍子がとてもすてきでした。体が自然に音楽にのって揺れていました。」

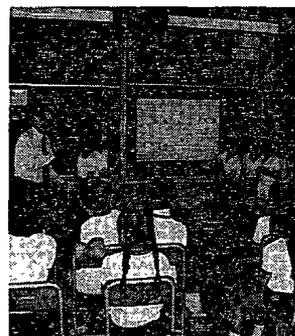
「最後に一回、歌ってみよう。」

「手ではなく、歌です。」

「今度の時間は、本格的に歌と楽器を加えて、春の風を仕上げたいと思います。」

「ありません。」

「えー、手拍子？」



### 3 分析と考察

(授業仮説に基づいて検証)

本時においては、表情豊かに歌う意欲を高めるための手だてとして、絵や記号を使って楽譜に表す活動や、リズム打ちをするなどの身体表現を通して曲想を感じとる活動を行った。すなわち、本時における図形楽譜の創作は、児童が曲想を感じとるための手だてであって目的ではない。この点について教師の思いと児童の学習活動との間にずれが生じてしまっていた。

そのことが端的に表れてきたのが、学習活動④である。この場面における発表で児童は、リズムと音の高低はよく理解し表現していた。しかし、曲想を表現するための音楽的な要素（音色、強弱、テンポ）に対する理解が十分とはいえなかったために、児童にとっては曲想を感じとるための手段であった図形楽譜の創作が、目的そのものとなってしまっていた。その改善のポイントはリズム模倣の場面における要素の精選（特に強弱に対する感覚）と「手拍子でたたこう」から「手拍子で歌おう」へとステップアップさせる場面における音楽を感じさせるための手だて（「たたこう」と「歌おう」では何がどちらがってくるのか）の工夫にあったと考えられる。

例えば、ある班の発表の発表児童の手拍子による表現において、聴き手の児童が手拍子のリズムから、曲のどの部分を表現しているかを感じ取り理解する場を設定したが、このとき「手拍子だけで歌が伝わるっていいね。」と

評価したが、本時のねらいから考えると、リズムが伝わっただけで曲想が伝わったわけではない。すなわち、この場面では、曲想を工夫する手だてを児童がつかむことにねらいを絞る必要があった。そう考えると、図形楽譜の創作は「春の風」の全曲を全部の班がする必要はなく、各班がフレーズごとに分担して曲想を工夫し、その成果を発表し合い、聴き手が発表者の工夫を感じ取りながら歌うことにより確かめ合い、クラス全班の発表が終了すると、クラス全員の曲想工夫の生きたオリジナルの「春の風」が完成しているといった学習活動の計画の方が、豊かな感性を育むといった視点からも有効であったものと考えられる。

さらにこの方法によると、合同音楽会なども計画でき、この場で他のクラスの曲想工夫のなされた「春の風」を聴き合い、クラスの壁を超えてさらに音楽で互いに高まり合うといった学習活動の発展も考えられる。これからの音楽教育を考えていく場合、まずクラスで高まる、次に学年で高まる。そして地域といった段階的高まりを期待した発展的見通しをまず教師が持ち、そのために何からスタートさせるべきかについて考え、計画を立て、実行していくといった展望ある研究姿勢が必要であると考えられる。

#### 4 おわりに

子どもの表現したいという意欲をどう育て、高めていくか。様々な角度から子どもに手だてを講じてみるのは当然のことであるが、大前提になるのは、子どもの内面にどれだけ価値あるものにあこがれる心が育まれているかではないだろうか。今回の「春の風」を例に取れば、音楽的にここはこういう風に歌ったらいいという話以前に、子どもの中に春がきたという喜びをどれだけ感じる心が育っているかが重要である。歌詞の中にえがかれている情景を頭からの知識としてでなく体を通して経験からイメージできるような心を大切に育てていきたいものである。こんなことが、自然の変化に鈍感で、春が来たからどうした？というような人間にできるであろうか。教師の感性が豊かな感性を育む支援の基盤といわれる所以である。今後の課題として自分自身の人間性をさらに磨いていき、子どもがあんな音楽がしたいというあこがれの気持ちを持てるような授業をめざし、研究を深めていきたい。

(福田 秀範)